

草庵仏教

第169号
(発行日)
2004年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou4@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
- 〈念仏座談会〉
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の〈同朋の会〉及び
第3土曜日の念仏会は休み。

真宗問答①

浄土に生まれるとは

B 「死んだら仏と言いますが、死んだ人はみな仏なのでしょ
か」
D 「世間でよくそういう風に言
われませんが、世間で言われてい
るような〈死んだ人はみな仏〉
というのは仏教の教えからは正
確とはいえません」
B 「人は亡くなると仏になるの
ではありませんか」
D 「死んだからといって人は仏
になるわけではありません」
B 「でも真宗のお説教で〈死ん
だ人は仏様です〉と時々お聴き
しますが」
D 「そういうお話で言おうとさ
れるのは、たとえば亡くなられ
た祖父母や父母などを仏と拝む、
という意味で言われるのであり
ましょう。そういう意味では〈死
んだ人は仏様〉といえましょう」
B 「亡き人を仏様と拝むとい
うことはいい得るのですね」
D 「ええ。亡き親や祖父母とか
だけではなく、時には〈先立つ
我子は善知識〉といわれるよう
に、先だつて亡くなっていく子
は私を仏法にあわせてくださる
仏様と拝むこともあります。そ
ういう意味で亡き人は私にとつ

ては仏であるといえるのですね。
それはしかし亡くなった方だけ
とは限りません。生きている人
であつても仏と拝むことはでき
ましょう」
B 「生きている人をも仏と拝む
ことはできるのですね」
D 「ええそうです。私を救わん
がために有縁の人となつて私を
真実(仏法)に導いてくださる、
そういう仏様のお働きとして人
を仏と拝むことはできます。た
だそれは〈私の側からいえば〉
ということですよ」
B 「生者も死者も、そういう方
々に対しては〈私の側から仏様
と拝むことができる〉というこ
とですよ」
D 「ええそうです。私に仏法を
お勧めしてくださる、いわば私
を仏法にお育てくださる諸仏と
して亡き人は私にとって仏様と
拝むことはできましよう」
*
B 「でも当人がたとえば〈私が
死んだらどうなるのでしょうか。私
になるのでしょうか〉と問わ
れたらどうなんでしょう」
D 「人をどう見るかではなくて、
自分自身はどうなるかという場
合ですね。それは本人が仏にな

る因を得ているのであれば仏に
なるでしょう。しかし、仏にな
る因がなくて、ただ肉体のいの
ちが死にさえすれば仏になると
は仏教ではいいませんね」
B 「では、仏になるといふその
仏とは？」
D 「簡単に言えば、真実を覚つ
たお方、覚りを完全に開いたお
方のことです」
B 「それすると、仏になるとい
うことは覚りをひらくことなん
ですよ」
D 「そうです。ですから死んだ
からといって覚りがひらけると
はいえないのです」
*
B 「では、真宗ではどうしたら
仏になるといわれるのでしょ
うか」
D 「本願を信じる信心によつて
といわれています。聖人のご和
讃に
弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばささるなり
とあります。弥陀の本願を信じ
る人はこの世からすでに阿弥陀
仏におさめ取られるという広大
な利益にあずかるがゆえに、こ
の世を終えて後、浄土に生まれ
て無上覚というこの上なき覚り
をひらく、すなわち仏になると申
されています」
B 「本願を信じる信心によつて
浄土に生まれて無上覚という仏

《 盂蘭盆会法要 》

8月16日(月)
午後2時始まり

*なお、8月は22日の同朋の会と
第3土曜日の念佛座談会は休みます。

の覚りをひらく、いわば仏にな
るのですね」
D 「ええ、そういうわれています。
『尊号真像銘文』に
真実信心をえたる人の如
来の本願の実報土によくい
るとするべしとのたまえる
みことなり。信心は菩提の
たねなり。無上涅槃をさと
るたねなりとするべしとな
り。
と聖人は仰せられています。菩
提も涅槃も覚りの異名です。信
心は覚りをひらくたね(因)で
あるといわれ、これを信心正因
というのです」
B 「では信心がない場合はどう
教えられているのでしょうか」
D 「信心がなければ覚りをひら
く因がないこととなります。そ
の場合は覚るたね(因)がない
のですから、いつまでも迷いの

状態に留まるといわれています。迷いの境界に流転するといわれているのです」

B 「死んでも迷いの領域に留まるといふことなのですね」

D 「ええ、そのようにお聞きしています」

*

B 「では、浄土に生まれるということと覚りをひらくということとと同じことですか」

D 「聖人は阿弥陀仏の浄土に生まれることは同時に覚りをひらくこととみでおられます。浄土を涅槃界ともいいますが、それについて聖人は『唯信鈔文意』に

涅槃界というは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。界は、さかいという。さとりをひらくさかいなり。

と申されて、浄土は覚りをひらく領域といわれます。そして、覚りをひらけば仏になるのです」

*

B 「覚りをひらくことと浄土に生まれることとは同じことなのですね」

D 「ええ。覚りをひらくというのは心の眼が完全に浄化されることです。見る心の眼が完全に浄化されたとき、見られる境界は浄らかな領域（浄土）が顕現するのであります。逆に、見る心の眼が煩惱で濁っている

と、見られる境界は濁った世界、いわば濁世（穢土）が現れるのであります」

B 「私たちは穢土にいるのですね。それは私たちの心が濁っているからなのですね」

D 「ええ、煩惱によって濁った心で生きているからです。多くの煩惱をもつ凡夫たちが共に感じ、共にやりとりして生きている世界が穢土なのです」

B 「そうすると地獄といわれるものも同じですか」

D 「そうなんです。瞋恚の煩惱によつて感得している境界が地獄といわれています。地獄は瞋恚といういかりの煩惱が生み出して、その生み出した地獄の境界に自身自身を閉じこめているのを地獄に堕ちているといふのです。地獄という世界がどこかに客観的にあるものではありません。怒り腹立ち妬みそねみという激しい瞋恚の煩惱によつて感得している境界が地獄です」

B 「私は地獄という世界なり境界なりが客観的に私たちの外にあるものとはばかり思っていました」

*

D 「なぜそうであるかといいますが、見るものと見られるもの、知るものと知られるもの、感じる心と感じられるもの、それらは本来一体だからです」

B 「知る意識と意識に知られている境界とは切り離せないのですね」

D 「ええそうなのです。本来一体で、切り離すことはできないのです。意識とか心といふのは分かりにくければ、たとえば肉体の目をとつてみても似たことがいえます。人間の目には人間の目に応じた世界しか見えていません。魚の目を持てば魚の見ている世界しか見えていないでしょう。ネズミの目にはネズミの目に映る世界しか感覚できないはずで、見る目と見られない世界とは別々に切り離せません」

B 「それはいわば人間は人間の心（認識）の枠組みでしかものを認識できないし感じていないといえますね。個人的にいえば、自分は自分の心の枠組みでしか環境や社会や人を見ていない」

*

D 「そういつていいと思います。そのことをもつと日常生活の上で考えてみますと、たとえば毎日のように出会っている人たち、家族とか友人とか隣り近所の人たちなどに対して、私たちは

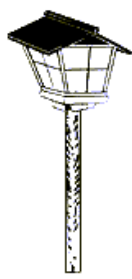
「Aさんはこんな人、Bさんはこんな人」と思つて、私が思っている通りの人が実際に存在するように知らず知らず思ひこんでいますが、AさんもBさんもそれは私の心のメガネに映っているAさんでありBさんであつて、私の思っている通りの人が実際に存在しているとはいへません。というのは、私たち凡夫はかならずといつていいほど自

己中心なかたよりでもつて周りの人を見たり感じたり判断したりしているからです。たとえば私の妻を私が「女房はこんな人」と思つても、私の子供が「母はこんな人」と思い、妻の母が「娘はこんな人」と思つている。みなそれぞれ自分の心や立場で見ているのであつて、妻がどういう人か、その本当の真相は「分からない」のです。それこそゆがみのない仏様の眼だけが知りましたものであります。ですからいつでも人を判断する時は、「私にはこう思われている」のであつて、「何々だ」と断定的に考えないようにできるだけ気をつけたいものです。どうしても偏見が私の判断に入つてきますから。公正に見たものは仏様のみと思ひます」

B 「我執我愛の心で他者を見ているのが凡夫ですから、どうしてもかたよるのですね」

D 「そうなんです。ただ、偏見がかならず凡夫の私には入るのだということを見ているかどうか。自覚せずに私の「かたよつた思いこみ」を実際の事実のように思つて、しばしば判断したり行動したりしますから、人間関係の上でいろいろやっかいなことが起こるのではないでしょう」

B 「本当にそうですね。偏見でものや人を見がちだということを見つめておくことは大事ですね」



誰哉行灯 1
(C)SHOGAKUKAN INC.

D 「かなり身近な話になつてしまいましたが、話をまた元に戻して、浄土は、我執的な迷妄を一切離れ、如実知見といわれるような仏の智慧の眼で感得される境界だといわれます」

B 「如実知見というのは？」

D 「事実があるがままに（如実に）見る覚りの智慧（仏智）のことです。覚りの眼のことです」

B 「そうすると覚りの眼が開けると浄土が感得されるのですね」

D 「ええ、そうなんです。そのように浄土が完全に感得されることの外に、浄土に生まれるということはないではありません」

B 「浄土に生まれるということはこの上ない覚りがひらけて浄土が感得されることなのですね」

D 「浄土は浄化された領域という意味で、煩惱の手あかのつかない真実アリノママの境界といわれます。私たちはすべてこうした真実アリノママの領域の中にすでにながら、煩惱の心をもっている故に、心の眼が濁つて浄土が見えなくなつていて、

とお聞かせ頂いています。浄土こそ本来ある真実の世界なのです。ところがその中にありながら自らの煩惱妄念（幻想）に

たぶらかされて、みずからの幻想の中に閉じこめられている」

B 「そういう迷妄の中にいる一人が私なのですね」

*

D 「ですから、浄土は未来（来世）だけにあるのではなくて、私の過去（あるいは過去世）にも現在（あるいは現世）にも、時間を超えてある領域といわれています。決して、死んでいく未来だけの、ここを離れたどこかにあるという場所ではありません」

B 「そういう浄土に生まれるのですね」

D 「ええ、その生まれ方は、たとえば重い白内障だった人が目の手術をする時々へ生まれ変わったように景色がきれいに見える」といいますが、煩惱が浄化されて覚りの心を得れば、まさに浄らかな浄土の領域を感得する、それはまさに「浄土に生まれた」と表現することができるといえます」

B 「なるほど」

D 「ですから浄土への生まれ方は、母胎から生まれる胎生とか卵から生まれる卵生ではなくて、化生という名で仏教ではよばれています」

*

B 「浄土に生まれる因すなわち無上の覺りをひらく因が信心なのです」

D 「ええ、本願を信じる信心です。信心が正しく浄土に生まれる因なのです。その信心は凡夫の心ではなくて、本質は仏心であり仏智です。ですから肉体が滅ぶのを縁としていただいた信心である因としての仏心が花開いて（覺りをひらいて）浄土を全面的に感得する。そこで信心について聖人は『尊号真像銘文』に

信心は菩提のたねなり。無上涅槃

をさとりたるたねなりとしるべしとなり。と仰せられています。信心はタネであり、覺りは咲いた花のようなものでありますよ」

B 「念仏信心の人は肉体が滅ぶのを縁として無上涅槃をさとるのでね」

D 「ええ、そういわれています。聖人の『教行証文類』に

念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。

とあります。臨終の一念に、横超の金剛心いわば真実信心のゆえに、大般涅槃というこの上ないさと（証）をひらくといわれるのです」

B 「涅槃というのは覺りと同じ意味と受けとつていいのです」

D 「煩惱が消滅した安らかな状態を涅槃といえます。それは覺りのお徳から名づけられたもので涅槃を得るとは覺りを開くこと同意と受け取ってください結構です」

(丁)

歎異抄第十五章第五講

「浄土真宗には、今生に本願を信じ、かの土にしてさととりをばひらくとならうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらしいか。

(歎異抄第1章)

現代語訳（往生浄土の真実の教えでは、この世において阿弥陀仏の本願を信じ、浄土に往生して覺りをひらくのであると法然聖人から教えていただきました」と、

今は亡き親鸞聖人のお言葉にはございました。）

*

浄土真宗のみ教えはこの世（今生）において弥陀の本願を信じ、この世の一生を終えて、浄土に生まれて覺りをひらいて仏にならせていただく、そういう教えであつて、この世で覺る教えでもなければ、この世で仏になる教えでもありません。この世で信心を得ると、それは浄土で仏になるべく定まったのであつて、直ぐ仏になるのではないと、重ねて唯円房はもうされるのです。

どうして、この世でのこの身で覺りをひらくといわないのでしょうか。次の世に浄土に生まれるなどとまわりくどいことをいわずに、この世は本来浄土であるから、この世で浄土に目覚めよと、なぜいわないのでしょうか。あるいは、この世で仏になるのではなく来世に仏になるなどと「幼稚なこと」をいわないで、禅宗などがよくいうように「衆生本来仏なり」だからこの世で覺りをひらいて仏になるのであると、なぜいわないのでしょうか。

*

実際この世の知識人を自認しておられる方が浄土真宗を云々されるとき、その多くは来世に浄土に生まれるという話をいやがり、すべてこの世のことにしてしまわれます。そして、今の生活の中で「浄土にいることを自覚せよ」とか「浄土を感得せよ」などともうされます。確かにその方が話が早いし、現代人の知性には了解しやすいのです。

それなのになぜ「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさととりをばひらく」と教えられ伝統されてきたの

でしょうか。

それは阿弥陀仏の見たもう人間観とそれをどこまでも救おうとされる大悲の深さから、浄土に生まれさせて仏にしようという往生浄土の教えとして、仏陀によつて説かれたのではないのでしょうか。

阿弥陀仏は、凡夫はあまりにも煩惱が盛んであり、罪の深い身を抱え、愚鈍なる存在であることを徹底的に見通され、その極悪深重の衆生をどこどこまでも救わんとして五劫の思案を重ねられたのであります。

今が本来浄土だから浄土に目覚めよといわれ、今の浄土を感得せよといわれても、悲しいかな目覚められぬ人間がこの私であります。人間のいのちは本来仏のちだから仏のいと自覚せよといわれても、いかにしてもそういう目覚めのできぬ私であります。また、歎異抄のこの章の異義でいわれるように、「信心を頂いたら今からすでにさとつたのだ」といわれても、あいかわらず浅ましい生活が続けてしか生きることのできない身であつて、「すでにさとつた仏と同じなんだよ」といわれてもとてもそうは思えない、罪深い私なのであります。

死んで後に浄土に生まれて仏になると仰せられるのは、罪業の身という現実をどこまでも離れないからでありましょう。単に死ねば佛になるというわけではありませんが、しかし「人間は死なねば仏になれない」といわれてきた、その意味するところは、人間の身の罪深さを深く感じてきた先達の実感からの言葉でありましょう。そういう我が身においては、「今生に本願を信じて、かの土にしてさととりをばひらく」という教えこそが本当に身にしみて有難いのであります。